

流れとともに変わる川の姿

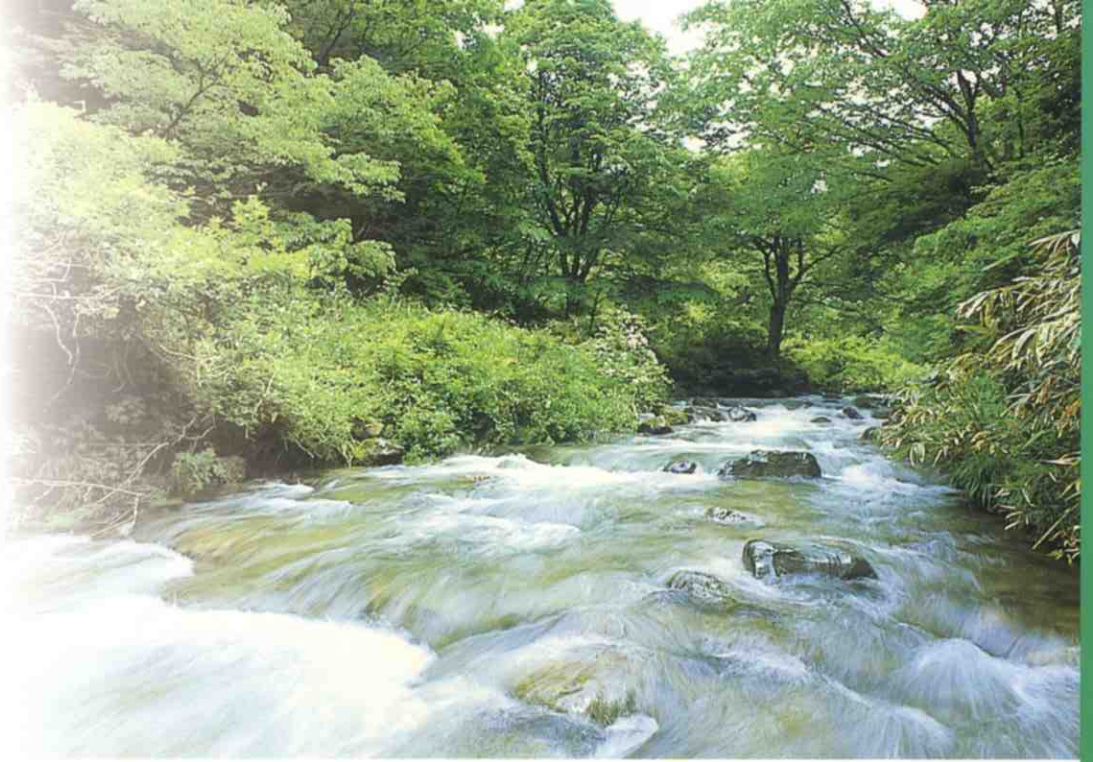


写真1…高時川/上流

私たちの暮らしとにあり、幼いころから慣れ親しんできた「高時川」。見られた川のように思っていて、実はその姿は一樣ではありません。上流、中流、下流、河口……それぞれ流れが異なれば、そこに生育する植物も異なります。ある初夏の一日、植物が専門の村瀬忠義先生（県立琵琶湖博物館）といっしょに、高時川を上流から河口まで歩いてみました。



【横断面模式図】

図1-上流

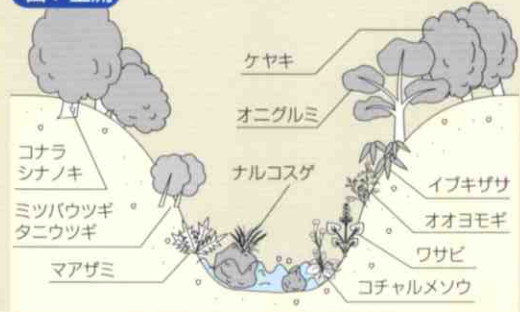


図2-中流

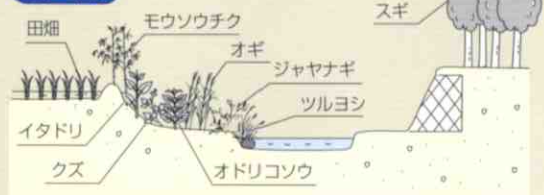
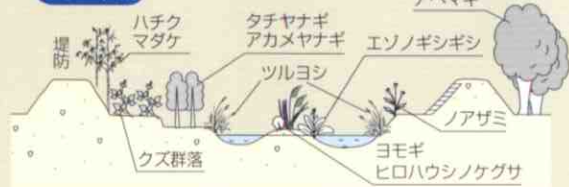


図3-下流



上流 美しく清らかな流れ、石の上で生きる草木たち

大きな角ばった石が多く、きれいな水が流れる上流域。まさに一幅の名画！とも言いたくなる景色が私たちを迎えてくれました（写真1）。急流の中の石にはコケ類やナルコスゲが、わずかな岩の割れ目にしがみつく。ように生きていました。激しい清流の流れに流されないように、細い糸のような姿をしています（写真2）。溪流の周りにはさまざまな植物が茂っています（図1）。ササの群落もあり、大部分がイブキザサ。湖北地方の特色です。

コチャルメソウ（写真3）の姿を発見！

果実の開いた形が何かに似ています。そう、ラッパに似た中国の楽器・チャルメラ。そこからこんな名前がつけました。おもしろい形ですね。このほか、もぐさの材料になるオオヨモギ、てんぷらにして食べたらおいしいマアザミなどもあり、谷には立派なおいしいオニグルミの姿がありました。オニグルミの実は信州あたりのカシクルミと異なり味が濃く、「あえもの」に使えば、カシクルミとは比較にならないほどおいしいですよ」と村瀬先生。

中流 水際の砂地に ツルヨシの姿が登場

中流域になると川幅が増し、水量も多くなります。上流では大きかった岩も少し丸みを帯びて小さくなり、水際にはツルヨシやジャヤナギの姿が……(図2)。ツルヨシは“砂礫地の植生の先駆者”とも言われ、中流域の水際の砂地など、やせ地でも繁殖する性質を持っています。

堤防斜面に目立つのはクズやイタドリ、オドリコソウ。このオドリコソウ、野山でよく見かける草ですが、花の部分をよく見て下さい。どうです、名前のとおり踊っている女性そっくりでしょう！(写真4)

同行者一同思わず声を上げたほどのかわいさ。普段何気なく見のがしている“草”たちですが、じっくり観察してみると意外な発見があるものです。



イタドリ(タデ科)
Reynoutria japonica



写真4…オドリコソウ(シソ科)
Lamium barbatum
笠をかぶった着物姿の女性が踊っているように見えることからオドリコソウという名前がつけました。



写真2…ナルコスゲ(カヤツリグサ科)
Carex curvicollis



写真3…コチャルメルソウ(ユキノシタ科)
Mitella pauciflora

下流 “帰化植物” 下るにつれて増える

下流になると川幅が一気に広くなり、中州（丸石河原）が出現してきます（図3）。本来、中州には独自の植物群のカワラヨモギ、カワラハハコ、カワラナデシコなどが団塊（パッチ）状に生えるのですが、高時川では護岸工事や公園化など、人間によって外から持ち込まれ帰化した植物（ヒロハウシノケグサ、セイタカアワダチソウ、エゾノギシギシなど）が大変多く、美しい花を咲かせる日本本来の植物群落が見当たりません。

「現在の高時川は水量が不安定で、ときには干上がったたり、ときには大水で植物が流されたり……昔の高時川の姿ではないでしょう」と村瀬先生。でも、堤防には「春に咲くアザミ」であるノアザミ（写真5）や、葉をおひたしにするとおいしいナンテンハギが赤紫色のあでやかな花を咲かせて

いました。

「現代のように護岸工事が行なわれないころは、堤防には在来のススキやチガヤ、クズ、などが優占し、それにたとえば秋の七草であるオミナエシ、キキョウ、フジバカマなどの混生した植物群落が草刈りによって維持されていました。刈った草は肥料や飼料に使われ、人々の暮らしとも密接につながっていました」（村瀬先生）。場所によって中流から下流にかけての堤防にはヤナギ群落の他にハチク、マダケ、モウソウチクなどの竹林が多く見られました。これは河川の特徴の一つで、これらのタケは中国から移入されたものとされています。中に張りめぐらされた地下茎が堤防を強化、防災上役立つうえ、筍は食用に、タケは加工して生活用具（資材）に利用されてきた貴重な植物でした。

河口 ヤナギとヨシの群落越しに 広がる琵琶湖のパノラマ

高時川は下流で姉川と合流、最終的には姉川として琵琶湖に流れ込みます。

姉川河口に達すると、一転豊かな植物群が登場します。土砂の堆積が著しく、栄養的には極めて肥沃な土地です。下流域でがっかりした同行者たちも、ここで元気を回復。河口北岸にはよく茂ったアカメヤナギ、タチヤナギの林と、その下にクサヨシの群落があり、南岸の低湿地にはさまざまな草が混生していました（写真6）。河口付近の水辺に近い河岸には、湖岸と同じヨシ、マコモ、ウキヤガラ、オギなどが生えていました。全国的には絶滅危惧植物であるノ



写真5... ノアザミ (キク科)
Cirsium japonicum



写真7... ノウルシ (トウダイグサ科)
Euphorbia adenochlora

安定した流れのたかとき川 に生まれ変われば……

ウルシの姿も（写真7）。滋賀県では、琵琶湖畔のヤナギ林の下に多く、春に黄色い若葉が目立つ植物なのですが、最近は姿がぐんと減っているものです。この湿地には鳥たちも多く、夕日がとてもきれい。周囲は公園に整備されています。

最近「生物の種の多様性の保存」が国際的に叫ばれはじめています。つまり、人工の森林や草地ばかりでなく、自然で生物相の豊かな地域を残すことが大切だということです。

今回、高時川を上流から河口まで歩いてみてわかったのは、中・下流域は生物の種類が乏しいということです。今は水量の増減が激しく、これが原因の一つではないかと推測されます。高時川上流に丹生ダムが完成すれば、川の水量が安定します。みなさんとともに昔のような豊かな自然がとり戻せるようにしましょう。



【村瀬忠義先生プロフィール】

1934年、滋賀県生まれ。95年、県立高校生物科教諭を定年退職。翌年から滋賀県立琵琶湖博物館勤務。「伊吹を守る会」が73年に発足以来同会の顧問を務め、伊吹山の植物調査、お花畑の保全事業を指導する。滋賀県、文化庁、環境庁など各種滋賀県内植物調査を担当。



写真6... 高時川 / 河口付近

お答えします

丹生ダムでは広報活動にも力を入れています。私たちの努力不足のため、伝えきれないこともあります。「あれはどうなったの?」「これはどういう意味?」。既に、さまざまなご質問が寄せられています。そこで今回、「たかとき川」の誌面をかりて、ご質問にお答えさせていただくことにしました。

Q 丹生ダムの目的の一つに洪水を防ぐ役割があるそうですが、どのようにして高時川の洪水を防ぐのですか。

A 高時川、姉川の中下流域は周りの宅地や田畑よりも川底が高い天井川です。このため、丹生ダムでは次の方法で洪水を防ぎます。

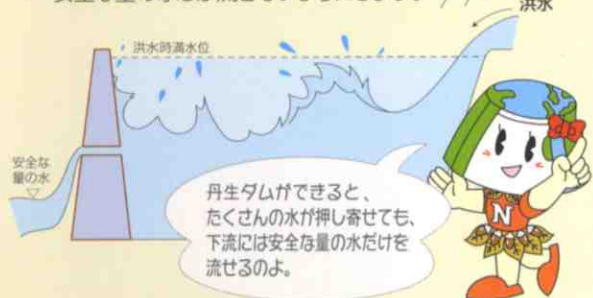
1 まず、洪水が起きやすい夏場(6月16日～10月15日)に予めダム湖の水位を下げ、洪水を貯める空間を用意しておきます。



3 このようにダムによって下流の洪水を小さくし、下流1市7町(余呉町、木之本町、高月町、湖北町、浅井町、虎姫町、びわ町、長浜市)の洪水被害を大幅に軽減します。



2 大雨が降ると、ダムから上流の洪水を一時的にダムに貯め、下流域には常に安全な量の水しか流さないようにします。



バイキンのお話しー

梅雨、そして初夏……0-157をはじめとする食中毒が怖いシーズンです。対策のポイントは「洗うこと」。なぜなら、食中毒は接触で感染するからで、手や調理器具を効果的に洗えば感染確率が減ります。「手洗いななかで?」と軽く見てはいけません。あのノストラダムスだって、ヨーロッパのベスト大流行(14世紀半ば/死者3000万人)を、シーツを清潔なものに換え、井戸水は沸かしてから飲み、遺体は火葬、同時にネズミの駆除に力を入れるなど、病原菌との接触を避ける方法で乗り切りました。

現代の私たちが0-157を撃退する際も、やはり第一は手洗い。コツは洗面器などにためた水ではなく、蛇口から流れ出る「流水」を使うこと。これだけでもかなりの効果がありますが、せっけんを使えばより確実です。患者の便に触れた……など感染の恐れが強いときは、逆性せっけんで手を洗うか、消毒用アルコールで殺菌します。意外な盲点はタオル。せっかくきれいに洗った手も、汚染されたタオルでふけば元の木阿弥。理想は温風で乾かすこと。それが無理なら清潔な乾いたタオルとひんぱんに取り替えましょう。



ポイント
は手洗い
ノストラダムス式の
0-157
対策を!

「水」を大切にー

「水の日」及び「水の週間」について

毎年8月1日は「水の日」、この日から1週間は「水の週間」です。この時期には、限りある資源である「水」の大切さを改めて理解してもらうため、ポスターの掲示、講演会の開催などの行事を全国的に実施。公団をはじめ関係団体や地方自治体が力を合わせて取り組みます。

i
n
f
o
r
m
a
t
i
o
n